

平成 31 年度

小 論 文

10 : 30 ~ 12 : 10

教養学部学校教育学科
一般入学試験

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙は 2 枚あります。1 枚は下書きに、1 枚は清書に使いなさい。
提出は 1 枚だけです。
3. 合図があったら、解答用紙の指定欄に受験番号を記入しなさい。
4. 落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合はすみやかに
申し出なさい。
5. この冊子は、持ち帰ってさしつかえありません。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちに置いて下さい。

設問 次の文章を読んで、問一と問二に答えなさい。

まず人がいて、自分があつて、そして言葉がある。言葉と人の係わりを言うとき、そうした順序で考えられるのが、まず普通です。ただ、言葉と人の関係について考えるなら、その順序を逆にして考えるほうがいい、とわたしは思っています。まず言葉があつて、自分があつて、そして人がいるというふうに。

この世にあつて、人にとつてなくてはならないと思えるもの、毎日の生活をささえてきたもののほとんどすべてというのは、人がつくりだしてきたものです。人はさまざまなものをつくろうとしてつくつてきたし、けつしてつくれないと思われるようなものすら、しばしばつくりだします。けれども、人にとつて絶対になくはないものというのは、必ずしも人のつくつたものではなく、言葉もそうです。

自分が生まれる前からずっとあつて、言葉は、わたしたち自身より古くて長い時間をもっています。ですから、わたしたちは言葉のなかに生まれてくる。そして、自分たちがそのなかに生まれてきたもつとも古い言葉を覚える。成長するとは、言葉を覚えるということです。つくるものでなく、あつらえるものでない。覚えるものが言葉です。

毎日の経験を通して、人は言葉を覚えます。覚えるのは、目の前にある言葉です。自分の毎日をつつんでいる言葉です。自分がそのなかに生まれてきた言葉というものを、あるいは言葉の体系というものを、自分から覚えることによつて、人は大人になつてゆく、あるいは、人間になつてゆく。そういうものが、言葉です。

にもかかわらず、覚えて終わりではなく、覚えた言葉を自分のものにしてゆくとすることができないと、自分の言葉にならない本質を、言葉はそなえています。

言葉を覚えるというのは、この世で自分は一人ではないと知ることです。言葉というのはつながりだからです。

言葉をつかうというのは、他者とのつながりをみずからすすんで認めるということであり、言葉を自分のものにしてゆくというのは、言葉のつくりだす他者とのつながりのなかに、自分の位置を確かめてゆくということです。

英語にしても、おそろしく地域性がつよく、専門家であればこの英語かほとんどわかると言います。シドニーはシドニー風英語、テキサスはテキサス風英語、ベルファストはベルファスト風英語というように、^②それでも英語が世界の通用語の位置をしめるようになったのは、英語くらい、言葉の完全さをでなく、言葉の不完全さを受け容れてきた言葉はすくなくないという歴史があるからだろうと思えます。

国境を越える言葉は、完全な言葉でなく、むしろ不完全な言葉なのです。たとえば、国境を越えて働きにゆく人たちのコミュニケーションをささえるのが、カタコト言葉と、表情と、身ぶりであるように、です。

その意味では、不完全さこそ言葉の本質と言ってよく、言葉を言葉たらしめるものは、違いの違いとして受けとめられるだけの器量です。

(出典 長田 弘『読書からはじまる』二〇〇六年、日本放送出版協会)

問一 筆者は傍線①のように述べていますが、それはどういうことですか。課題文に即して二〇〇字以内で答えなさい。

問二 課題文中の傍線②のように『不完全さを受け入れる』ことで広がりをもせる『もの』や『こと』を具体的に示し、それについて筆者の主張をふまえながら八〇〇字以内で説明しなさい。